よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

31

よろこびの知らせ
第 31 集

目　　次

最高の祈り …… 1
ルカ 18:9-14

ほんとうの忠実さ …… 10
ルカ 19:15-24

十字架を背負う …… 19
ルカ 23:20-26

小羊になった羊飼い …… 28
イザヤ 53:7-9

ここに収められたメッセージは、2022 年 3～4 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2022, Philip Nakao

最高の祈り
ルカ 18:9-14

18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対
しては、イエスはこのようなたとえを話された。
18:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ
人で、もうひとりは取税人であった。
18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神
よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者で
はなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。
18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の
一をささげております。』
18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとも
せず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私を
あわれんでください。』
18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りま
した。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高
くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

きょうのたとえ話には、二人の登場人物が出てきます。ひとりはパリサイ人、もうひとりは取税人です。「パリサイ人」とは、ユダヤの宗教の伝統を厳格に守っている人たちで、その多くは学者であったり、最高法院の議員であったり、また、民衆の指導者でした。一方の「取税人」は、ローマの役人に雇われて、同じユダヤ人からローマに収める税金を取り立てていた人々で、彼らは「敵国であるローマに魂を売った」と非難されていました。それに取税人のほとんどは不正を働いて私腹を肥やしていましたから、とても軽蔑されていました。

このパリサイ人と取税人の二人が同時に神殿に行き、それぞれに祈りをささげました。パリサイ人は何をどう祈り、取税人は何をどう祈ったのでしょうか。二人の祈りを比べてみましょう。

一、パリサイ人の祈り

まず、パリサイ人はどう祈ったでしょうか。11 節に「パリサイ人は、立って」祈ったとあります。神殿の庭には、椅子などありませんから、みんな立って祈るのです。きっと、胸をそらし、両手をまっすぐに上げて祈ったことでしょう。立って、天を仰ぎ、手を伸ばして祈ることは、決して不自然なことではありません。当時の男性はそのようにして祈ったのです（テモテ第一 2:8）。しかし、パリサイ人のこの姿勢には、彼の高慢な思いが表れています。

パリサイ人はこう祈っています。「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。」（11 節）パリサイ人は、「神よ。…感謝します」と言っていますが、これはほんとうの感謝ではありません。彼は、ここで、自分を、自分よりも劣っていると思える人々とくらべ、自分がいかに立派であるかを、誇っているにすぎません。パリサイ人は「私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではない」と言いましたが、ほんとうに、彼は、誰にも親切にし、完全に正しいことをしていたのでしょうか。詩篇 24:4-5 に「だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる

所に立ちえようか。手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人」とあります。パリサイ人はその手を神に向かってさし伸ばしていますが、はたしてその手はほんとうに清く、その心もきよいものだったのでしょうか。祈りとは、神の前に出て、自分の姿を正しく見、自分の心を深く思いみることです。そんなときに、自分と他の人を比べて、「私はほかの人々のようではありません」などと言っているのは、このパリサイ人は、その手も心もきよくはなかったことを示しています。

パリサイ人は、彼の近くにいた取税人をちらっと見て、「ことにこの取税人のようではないことを、感謝します」と言いましたが、これは、祈りを使った他の人への非難です。こうしたことは、クリスチャンが時として陥る罪です。たとえば、夫婦喧嘩の時に、ご主人が奥さんのために祈るのだと言って「このどうしょうもない女の罪を赦してあげてください」などと祈り、奥さんもご主人のために「この頑固で罪深い亭主が悔い改めますように」などと祈るとしたら、それは、祈りの中で相手をけなしているだけで、お互いのために祈っていることにはなりません。実際そういう事をしてだめになった夫婦がありました。祈るときには、まず、「神さま。私の罪を示してください。私のいたらなさを教えてください」と祈るべきです。

パリサイ人の祈りは、また、偽善の祈りでした。11節に「パリサイ人は、…心の中でこんな祈りをした」とあ

ります。当時、祈る時には声を出して祈りましたが、彼は口にしていた言葉とは別のことを心に持っていて、イエスは、このパリサイ人の心の声を明らかにされたのです。ユダヤでは、神に祈るときには、まず悔い改めから始めましたから、このパリサイ人も、口では悔い改めの言葉を唱えていたのでしょう。しかし、心では、自分の「立派で、敬虔な」生活を誇っていたのです。彼は心に高慢な思いを持っているのに、口では謙遜そうな言葉を唱えていました。この心と言葉とのちぐはぐさを、聖書は「偽善」と呼んでいます。神が最も嫌われるのは、偽善です。イザヤ 29:13 に「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている」とあって、偽善と不信仰が非難されています。

不信仰が、心と言葉の不一致であるなら、信仰とは、心と言葉が一致することであると言うことができます。ローマ 10:10 に「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」とあります。この「告白する」という言葉のもともとの意味は、「同じことを言う」です。何と同じことを言うのでしょう。まず、神のことばと同じことを言うのです。神のことばが「すべての人は罪を犯した」と言う時、私たちも「私も罪を犯しました」と言い、神のことばが「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた」と言う時、私たちも「主イエスは私の罪のために十字架に死に、私を神の前に正しい者とするために、復活しました」と言うのです。神のことばを心に信じ受け

入れ、信じ受け入れたことを口で言い表す。これが「告白」です。

告白は、また、心にあるものと同じことを話すことです。心にあるものを覆い隠さず、神の前に正直に語ることです。心に不安があれば「私には不安があります」と祈れば良いのです。思い煩いがあれば「私には思い煩いがあります」と祈り、怒りやねたみを抱くことがあったなら、それも正直に神の前に言い表わせばいいのです。自分のほんとうの姿を隠して「おりこうさん」のクリスチャンとして神の前に出なければならないと考えているとしたら、それは間違いです。真実な神に、言葉と心の一致した真実な祈りをささげましょう。

二、取税人の祈り

次に、取税人の祈りを見ましょう。パリサイ人は胸をそらせ、天を仰ぎましたが、取税人はうつむいて祈りました。パリサイ人は手を天に向かってさし伸ばしましたが、取税人はその手を胸にあて、胸を打ち叩いて祈りました。パリサイ人は目を天に向けましたが、その目は神を見つめてはいませんでした。一方、取税人の目は天に向けられてはいませんでしたが、信仰の目で神を見つめていました。神を見つめていたからこそ、取税人は、自分の罪を知り、自分の惨めさを見ることができたのです。そして、悔い改める者に向けられる神のあわれみを、その信仰の目で見ることができたのです。

次に、取税人は、自分を「罪人」と呼びました。パリサイ人は自分の正しさ、立派さを、神の前に長々と並べ

たてましたが、取税人は、たった一言、「こんな罪人の私をあわれんでください」としか祈っていません。どんな言い訳もせず、ただ自分を「罪人」と呼んで悔い改めたのです。

聖書は罪を教え、その教えの基礎に「すべての人は罪人である」という真理があります。「そのような教えは人間をいやしめるものだ」と言って、聖書から「罪」という言葉を取り去ろうとする人たちもいますが、聖書は決して人間をいやしめるためにそう言っているのではありません。人間が神のかたちに造られた素晴らしい存在であり、一人ひとりが、この地球全体よりも価値のあるものだからこそ、罪から救われる必要があることを、聖書は教えているのです。もし、人間が、単細胞の生物だったら、ほんの一夏の命しか与えられていない昆虫のようなものであったら、また、本能のままに生きる動物だとしたら、人類に罪は入ってこなかったでしょう。人間が、神のみこころを理解し、神に従うことも逆らうこともできるほどの優れた存在であるからこそ、罪人となったのです。人間に罪があるということを教えるのは、決して、人間を低く見ることではなく、人間の素晴らしさ、尊さ、その価値を認めればこそなのです。

使徒パウロは、ユダヤの由緒正しい家柄に生まれ、エルサレムで、当時最も高名なガマリエルという学者のもとで学んだ立派な学歴を持っていました。キリストに出会ってからは、キリストの使徒となり、当時の世界のいたるところに、有力な教会を建てあげ、新約聖書の大半

を書きあらわしました。彼には、「使徒パウロ」、「聖パウロ」という他に、考えられる限りのタイトルを与えてもよいほどです。しかし、パウロは一切の人間的なものを拒否して言いました。「私は罪人のかしらです。」（テモテ第一 1:15）私たちも、パウロと同じように「私は罪人です」と告白して、主イエスが私たちの罪のために十字架で死なれたことを信じ、救われました。もし、私たちが罪人でないのなら、主の十字架はいらなくなってしまいます。礼拝では、私たちはみな罪人として神の前に出ます。十字架を仰ぎ、赦しと平安、喜びと力を受けます。また、赦された罪人として互いに赦し合います。

イエスは、パリサイ人と取税人の二人の祈りについて話されてから、こう言われました。「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（14 節）ここで、「義と認められた」という言葉は、彼の過去の罪が赦されただけでなく、これから歩むべき正しい生活へと導かれていくことも意味しています。「義と認める」というのは、単に、過去の罪を帳消しにするとか、大目に見るということではありません。その人に新しい心を与え、新しい人生を与えることです。取税人であったマタイやザアカイがその良い例です。マタイは収税所での役職を捨ててキリストに従い、ザアカイはいままでの不正をすべて償っています。自分

の正しさを主張し続けたパリサイ人は、長々と祈っても、彼の心も生活も何も変わらないまま家に帰りました。取税人は、ひとこと、「こんな罪人の私をあわれんでください」と祈っただけですが、彼の心と生活を変える大きな神の力をいただいたのです。

三、最高の祈り

この取税人の祈りから、5 世紀ごろ、「ジーザス・プレーヤー」が生まれました。英語で “Lord Jesus Christ, Son of God, have mercy on me, a sinner.” と祈るので、そう呼ばれるようになりました。「主イエス・キリスト、神の御子、罪人である私をあわれんでください」という祈りは、古代のクリスチャンが日々に祈った祈りでした。これは「呼吸の祈り」とも言われ、息を吸いながら「主イエス・キリスト、神の御子」と唱え、息を吐きながら「罪人である私をあわれんでください」と祈ります。また、歩きながら、右足を出すときに「主イエス・キリスト、神の御子」と唱え、左足を出すときに「罪人である私をあわれんでください」と祈ることもできます。「プレーヤー・ロープ」を使って何回も繰り返し祈る慣習もあります。

ジーザス・プレーヤーは、「イエスはキリスト、主、神の御子です」という告白と、「私は罪人です」という告白の二つから成り立ちます。きよく、正しく、いと高いお方と罪人である私。どこにも接点が無いようですが、じつは、この二つは神の愛とあわれみによってしっかりと結びあわされているのです。神の御子は罪人を

救ってくださるのです。取税人が「こんな罪人の私」と言って、神の前に出たとき、神が彼を「義と認め」てくださったように、私たちも「罪人である私をあわれんでください」とへりくだって祈るとき、私たちにイエス・キリストの恵みが下るのです。この「罪人である私をあわれんでください」との祈りは、古代から、人がなしうる「最高の祈り」とされてきました。最もへりくだった祈りこそ、イエス・キリストに触れる祈り、神のみこころに届く、最高の祈りなのです。このことを忘れずに、へりくだって、あわれみを求めて祈り続けましょう。

（祈り）

父なる神さま、聖なるあなたの前に出るとき、私たちはただ胸を打ち叩いて「こんな罪人の私をあわれんでください」と祈る他ありません。しかし、この祈りは、あなたの心を動かし、御腕を動かす、力ある祈り、最高の祈りです。あなたは私たちの心からのへりくだりと真実な求めに答えて、罪を赦し、心と身体と生活のすべてを癒やし、喜びと平安、また、あなたのために生きる力で満たしてくださいます。あなたに「あわれんでください」と願い求めて聞かれなかった人はありません。私たちがこの祈りを私たちの日々の祈りとすることができますよう、導き、助けてください。主イエス・キリスト、神の御子のお名前で祈ります。

ほんとうの忠実さ
ルカ 19:15-24

19:15 さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼らを呼び出すように言いつけた。
19:16 さて、最初の者が現われて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』
19:17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』
19:18 二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』
19:19 主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』
19:20 もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。私はふろしきに包んでしまっておきました。
19:21 あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』
19:22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。
19:23 だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』
19:24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナ持っている人にやりなさい。』

一、再臨に備える忠実さ

聖書は「世の終わり」について教えています。地震や

火山の噴火、洪水や干ばつなどの大規模な自然災害、また疫病や戦争などが「世の終わり」のしるしであると言われていますが、今、私たちはそれを目の当たりにしています。「世の終わり」には独裁的な政治権力と国際的な経済力を持った者たちが結託して世界を支配し、人々の生活が管理され、自由が失われ、信仰を持つ者が圧迫され、迫害を受けることも預言されています。そうしたことは、今まさに起こっており、「世の終わり」が始まっていると言ってよいでしょう。

しかし、忘れてはならないのは、聖書が教えているのは「世の終わり」という希望のないことではなく、「神の国のはじまり」という希望に満ちたことだということです。世が終わるのは、神の国が始まるためです。古いものが滅び、滅びることのない新しいものが生まれるのです。ですから、まことの神を信じ、イエス・キリストを信じる者たちは、「世の終わり」という言葉に惑わされたり、怯えたりしません。むしろ、「神の国のはじまり」を待ち望むのです。

ストックホルム国際平和研究所によると 2021 年 1 月現在、アメリカは 5,800 の核兵器を持ち、うち 1,800 がアメリカ国内とドイツ、イタリア、オランダ、ベルギーに配備されています。ロシアは 6,375 の核兵器を持っており、かつてはウクライナ、ベラルーシ、カザフスタンに配備していましたが、今は 1,625 の核弾頭を自国にだけ配備しています。他にイギリス、フランス、中国が相当数の核兵器を持ち、配備済みです。これらの国々は核兵器拡散

防止条約に入っていますが、インド、パキスタン、北朝鮮、イスラエルは核兵器を持っていても条約に加わっていません。こうした国々が核のボタンを押し、互いに報復すれば、確実に世界は終わります。それでも、世の終わりは、世界を終わらせたいと願う人物の意志や力、または人が決めた方法によってもたらされるのではありません。世の終わりと神の国のはじまりは、その王であるイエス・キリストが再び世に来られることによってもたられます。キリストが再び世に来られること、それは「キリストの再臨」と呼ばれています。

イエスは、まだ地上におられたときから、ご自分が十字架と復活ののち、昇天し、再びこの世に来られることを預言しておられました。きょうの「ミナのたとえ」でも、そのことが預言されています。11 節にこうあります。「人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも現われるように思っていたからである。」群衆の多くは、イエスがエルサレムに入城したら、自らが王であると宣言して、イスラエルをローマ帝国から独立させてくれると期待していました。

しかし、イエスは、その時は今ではないと言われました。12 節に「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった」とあるように、イエスは一度世を去ることが示されています。しかも、イエスが世を去るのは、人々に憎まれ、斥けられ、十字架にかけ

られることによってだったのです。14 節に「しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません』と言った」とあるのは、そのことを指しています。イエスは、これらの言葉によって、十字架と復活、昇天と再臨を預言しておられたのです。イエスはすでに天で「王位を受けて」おられます。そして時がきたら、もう一度、この世界に帰ってこられます。

イエスの昇天からすでに二千年以上がたちました。あとどれくらい待てば、イエスが再臨されるのか、それは誰にも分かりません。イエスご自身も「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」（マタイ 24:36、マルコ 13:32）とおっしゃいました。これは、イエスが再臨の時期については父なる神に委ねておられることを意味します。御子イエスでさえそうなら、私たちはなおのことです。私たちが知るべきことは再臨の年月日ではありません。再臨に備えてどう生きるかということです。「ミナのたとえ」は、私たちにそのことを教えるために語られました。

二、賜物を用いる忠実さ

このたとえでは、主人が 10 人のしもべたちに、それぞれ 1 ミナづつ与えたことが書かれています。イエスの側近くには「十二弟子」がいましたが、イエスは 12 人ではなく、10 人のしもべを登場させています。それによって、特別に選ばれた人々だけではなく、すべての信仰者に

「ミナ」、つまり主から与えられた努めとそれを果たす賜物とが与えられていることを教えようとされたのです。

「ミナ」はお金の単位で100デナリに相当します。1デナリは1日分の賃金ですから、1ミナは100日分の賃金に相当します。そんなに大きな額ではありませんが、小さい額でもありません。1ミナだけでは新規の商売をはじめるのは難しいでしょうが、この10人のしもべはすでにそれぞれの商売をしていて、資本を持っており、1ミナは追加の資金だったと思われます。10人が10人とも主人から1ミナづつ平等に受け取りました。このように、私たち信じる者には、ひとり残らず、平等に賜物が与えられているのです。聖書は、「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい」（ペテロ第一4:10）と言って、賜物の無い人など誰もいないことを教えています。

「平等に」と言っても、皆が同じ賜物を持っているのではありません。それぞれに違います。誰もがその人でなければできないものを与えられています。ある人には物事をきちんと整理し、準備する賜物があります。病気の人を見舞って世話をする賜物を持った人もあれば、教会を休んだ人に電話したり、カードを送ったりする賜物を持った人もあります。人を暖かく迎えることができる人、特に何かをすることがなくても、そこにいるだけで安心感を与えてくれる人もいます。こうしたことは、ど

れも素晴らしい賜物です。賜物は人によってそれぞれ違います。違うからこそ互いに仕え合って、足らないところを埋め合わせることができるのです。

主人は、帰ってきた時、10人のしもべを呼び出して、それぞれがどんな商売をしたかを報告させました。最初の人は1ミナを元手に10ミナを儲けました。主人はこの人を褒めて言いました。「よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。」二番目のしもべは1ミナを元手に5ミナを得ました。主人は彼に5つの町を治めさせました。主人は、儲けを得たことを褒めたのではありません。彼らが主人から与えられた努めに忠実であったことを褒めたのです。

ところが三番目のしもべは、こう答えました。「ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。私はふろしきに包んでしまっておきました。あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。」このしもべは主人から預かった1ミナを使いませんでした。その言い訳けに主人を「計算の細かい、きびしい、恐ろしい人」と言い、「預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取る不公平な人」とさえ言ったのです。主人はその言葉を聞いて、このしもべから1ミナを取り上げてしまいました。

このしもべは主人を全く誤解していました。主人はお

金のことばかり気にしているから、要するにお金を無くさないようにすれば良いのだと考えたのです。しかし、主人がしもべたちに期待したのは「儲け」ではありません。与えられたものに対する「忠実さ」でした。たとえ商売に失敗して1ミナを失くしたとしても、主人はしもべが努力したことを認めたでしょう。主人は自分が王となったなら、しもべたちに町々を治めさせるつもりでした。今日でいえば、知事や市長にすることです。彼らは、もはや、しもべではなく、人々の上に立つ者になるのです。主人は、その立場に立つための能力を、1ミナを活用することによって得させようしたのです。主人が願ったのはしもべたちが、その忠実な努力によって、人間として成長することでした。ところが、不忠実なしもべはそうした主人の心を理解しませんでした。自分の狭く小さな考えによって主人を推し量り、主人について間違ったイメージを持っていたのです。

私たちも、主から与えられた努めについて、失敗を恐れて何もしないでいたら、主はそれを悲しまれます。それは、決して忠実な生き方ではありません。主から与えられたものを眠らせたままにしているのは、大きな不忠実なのです。そして、そうした消極的な生き方をするのは、主がたとえ失敗しても赦し、癒やし、力づけて、何度でも立ち上がらせてくだる寛大なお方であることを見失っているからなのです。

主は、どんな小さなことでも、私たちが主のためにしたことを覚えていて、それに報いてくださいます。「神

は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです」（ヘブル 6:10）との御言葉を覚えていましょう。主は真実なお方です。そのことを知り、信じるとき、私たちもまた、主に対して忠実でありたいと願い、そのように生きることができるようになるのです。

三、福音を証しする忠実さ

きょう、私たちは、一人ひとりに努めと、それを果たすための賜物が与えられていることを学びました。その賜物の中には「福音」が、その努めの中には「福音を証しする」ことが含まれています。私たちは、イエス・キリストが私たちを救ってくださるというグッド・ニュース、「福音」を聞いて救われました。ですから、救われた人は誰もが「福音」を持っています。そして、「福音」を持つ者には、それぞれが自分の言葉で福音を語り、自分の生活を通して福音を証しする努めが与えられています。

福音を語るといっても、誰もが宣教師になり、伝道者になるわけではありません。神が私たちに求めておられるのは、自分のいる場所で、身近な誰かに福音を証しすることです。その人の救いのために祈ることです。それは、さきほど話したように、声をかけたり、電話をしたり、教会に誘うといった小さなことかもしれません。しかし、そうした小さなことに忠実であることを神は求めておられるのです。

私たちは福音を証しする自由をあたりまえのようにして享受していますが、それは最初からあったものではなく、初代のキリスト者たちが命がけで勝ち取ったものです。もし私たちが福音を正しく理解せず、福音に忠実でなければそれは、その自由は奪い去られてしまいます。実際、世界中で福音を証しする自由が奪われています。信仰者が自らそれを放棄しています。世の終わりが近づくにつれて、その自由は狭められ、やがて、福音を語れなくなる時代がやって来ます。その時が来ないうちに、私たちは、福音を証しすることにおいて忠実でありたいと思います。それが再臨を待ち望む私たちに求められていることなのです。

（祈り）

父なる神さま、「世の終わり」の近いことを感じさせるこのごろですが、それだからこそ、私たちが今しなければならないことが何なのかを教えてください。そして、どんな時でも、真実なあなたに対して忠実に生きることができるよう助け、力づけてください。主イエス・キリストの再臨を待ち望み、主の御名で祈ります。

十字架を背負う
ルカ 23:20-26

23:20 ピラトは、イエスを釈放しようと思って、彼らに、もう一度呼びかけた。
23:21 しかし、彼らは叫び続けて、「十字架だ。十字架につけろ。」と言った。
23:22 しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。「あの人がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」
23:23 ところが、彼らはあくまで主張し続け、十字架につけるよう大声で要求した。そしてついにその声が勝った。
23:24 ピラトは、彼らの要求どおりにすることを宣告した。
23:25 すなわち、暴動と人殺しのかどで牢にはいっていた男を願いどおりに釈放し、イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。
23:26 彼らは、イエスを引いて行く途中、いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ、この人に十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた。

あと 2 週間でイースターがやってきます。イースターはイエスが復活した日、「いのちの祭典」です。しかし、私たちがイースターにイエスの命に生かされるためには、その前のレントの期間にイエスの苦しみを想い、受難週にイエスの死の意味を理解する必要があります。聖書は、イエスの死の意味について、「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた」（ローマ 4:25）と、はっきり教えています。しかし、このことが、たんなる知識で終わ

ることなく、私たちの力となり、喜びとなるためには、イエスの十字架への道をたどる必要があります。そのためには、イエスとともエルサレムに向かった弟子たちや、十字架をめぐってイエスに関わった多くの人物と自分とを重ね合わせてみるとよいと思います。もし、私が「ペテロ」だったらどうしただろうか。「ヨハネ」だったら、あの人、この人だったたら、また、群衆の中のひとりだったら、と考えてみるのです。そのことによって、イエスの十字架の意味をより深く知ることができるようになるでしょう。聖書が、イエスおひとりではなく、イエスの十字架をめぐる多くの人々を細かく描いているのは、そのためだと思います。

きょうの箇所には、イエスの他に三人の人物が登場します。「ピラト」と、「バラバ」、そして、クレネ人「シモン」です。

一、ピラト

最初の「ピラト」は、ローマから派遣されたユダヤ総督「ポンテオ・ピラト」です。「ポンテオ・ピラト」の名は「使徒信条」に「主は…ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け…」とありますので、私たちは毎週、その名を口にしています。救い主の死と自分の名前とが結びつけられているのは、ピラトにとっては不名誉なことでしょうが、確かに彼には、イエスを十字架に追いやった責任がありました。

ピラトは、ユダヤの最高法院がイエスを訴え出たのが宗教的な理由であることを知っていました。ですから、

そうした訴えにはかかわりたくないと思っていました。聖書は、「ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていた」と言っています（マタイ27:18）。ルカの福音書ではピラトが3回も、イエスの無罪を主張したと書いています。「この人には何の罪も見つからない」（ルカ27:4）、「あなたがたが訴えているような罪は別に何も見つかりません。…見なさい。この人は、死罪に当たることは、何一つしていません」（14、15節）、「あの人がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します」（22節）とある通りです。

それなのに、ピラトはイエスを十字架に引き渡しました。なぜでしょう。聖書は「ところが、彼らはあくまで主張し続け、十字架につけるよう大声で要求した。そしてついにその声が勝った」（23節）と言っています。ピラトは、物事を正しく判断する知性は持っていましたが、正しいことを貫き通す誠実さは持ち合わせていませんでした。最後には自分の利益になるほうを選ぶような人でした。それで、「人々の声」に負けてしまったのです。

民主主義の時代には「人々の声」を聞くことは大切です。しかし、民衆が目先のことだけしか見ることができず、最終的には人々を不幸にするものを要求するなら、指導者たちは多数の声に逆らってでも、人々を説得し、正しい事を行わなければならないこともあるのです。ま

して、裁判では、事実と法律に基づいて結論が出されるべきで、判決は不当な圧力で曲げられてはならないのです。ところが、イエスの受けた裁判は、民衆の声によって左右された、まったく不正なものでした。

ピラトの時代にはローマの権力は絶対で、ピラトはその権威を帯びていたのですが、ローマの属国には、総督が不当なことをした場合、それをローマ皇帝に、つまり、ローマの高等裁判所に訴えることが許されていました。ピラトはそのことを恐れていたのです。そして、自らはイエスの無罪を主張したのに、実際はイエスを十字架に引き渡すという矛盾したことをしてしまったのです。ピラトは、責任逃れをしたつもりなのでしょうが、このことによって、総督としての職務を放棄し、ローマの権威を傷つけました。結果として、彼は、総督の地位を解かれ、失意のうちに自ら命を絶ったと伝えられています。

もし、自分がピラトの立場だったら、どうしただろうか。果たして、「イエスに罪はない」という主張を最後まで貫き通せただろうか。自分の立場を守ろうとして、自分が信じていること、確信していることを引っ込めはしなかっただろうかと、心を探られます。人の声に耳を貸すことは良いことであり、必要なことです。しかし、もっと大事なことは神の言葉に従うことです。いつの時代、どんな場合でも、神の言葉に従うとき、間違いのない歩みをすることができます。人の声や自分の声しか聞かないで過ちを犯すことがないようにしたいものです。

使徒たちが「人に従うより、神に従うべきです」（使徒5:29）と言った言葉を心に留めたいと思います。

二、バラバ

次に「バラバ」ですが、この名は「バル」と「アバ」から成り立ち、「父の子」という意味になります。当時は苗字がありませんでしたから、人々は、「誰々の子某」と呼ばれました。ペテロは「バルヨナ（ヨナの子）・シモン」でした。ところが、この人は「父の子」としか呼ばれていません。確かに誰もが「父の子」なのですが、この名は、人が本来、神のかたちに造られた「天の父の子」であることを思わせてくれます。子が父の遺伝子を受け継ぎ、父と似たものになっていくように、人は誰しも「神のかたち」に造られ、天の「父の子」となることを期待されているのです（マタイ5:45）。ところが、人は、その罪のために「神のかたち」を傷つけ、天の父とは似ても似つかぬものとなってしまいました。

こんな話があります。ある画家が、若いころ、天使の姿を描きたいと思い、あどけなく、かわいい男の子を見つけ、その男の子をモデルに天使の姿を描きあげました。その画家が晩年になって、ふと、悪魔の姿を描こうと思い立ちました。そして、監獄を訪ね、その中でも一番凶悪な死刑囚をモデルに悪魔の絵を描き始めました。モデルの男と話しているうちに、画家は驚いて、絵筆を落としてしまいました。その男は、この画家が天使の絵を描いたときモデルになった男の子の「成れの果て」

だったのです。画家は、そのことを知ったとき、「人は、天使のようにも、悪魔のようにもなれるものなのか」と、心の中で叫びました。

そうです。人は、天使のようにも、状況によっては、悪魔のようにもなるのです。「バラバ」も、神から離れ、殺人犯となって投獄されるまでになりました。しかし、人は「悪魔のように」はなっても「悪魔」そのものにはなりません。悪魔はすでに神の裁きのもとにあり、決してもとの天使に戻ることはできませんが、人間は、たとえどんな凶悪な犯罪者になったとしても、なお、神の愛の対象であり、悔い改めて「父の子」となることができるのです。そして、そのために、イエスは、死んでくださったのです。

イエスが十字架にかけられたのは過越の祭のときでした。そうしたユダヤの祭日には、囚人に恩赦を与えるという慣わしがありました。ピラトはその恩赦をイエスに与えようとしたのですが、人々はバラバを赦し、イエスを十字架につけるよう要求しました。もし、イエスがピラトに引き渡されなかったら、バラバが十字架にかけられていたのです。バラバほど、イエスが罪人の身代わりとして死なれたという真理を、そのまま体験した人はありません。「バラバ」は私のことでしたという証しを聞いたことがありますが、皆さんは自分とバラバとを重ね合わせて、どのような思いに導かれたでしょうか。

三、シモン

最後に「シモン」のことを考えてみましょう。当時、

十字架にかけられる者は、自分の十字架を背負って刑場まで歩かされました。イエスも十字架を背負わされたのですが、衰弱しきっていましたので、途中で何度も倒れました。ローマ兵はさっさと処刑を終わらせたかったので、見物人の中から、力のありそうな男を連れてきて、イエスの代わりに十字架を背負わせました。それが、シモンでした。

日本では、昔、地方から都会に出てきて、まごまごしている人を「おのぼりさん」と言ったのですが、26 節に「いなかから出て来たシモンというクレネ人」と書かれていますので、おそらく、シモンはエルサレムに来たのははじめてという「おのぼりさん」の一人だったのでしょう。エルサレムで過越の祭を楽しもうとして遠くからやってきたシモンにとって、死刑囚の代わりに十字架を背負うなどというのは、まったく、降ってわいた災難でした。

けれども、このことは彼の救いとなりました。イエスはかつて弟子たちに言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（ルカ 9:23）しかし、十字架の側にまでついて行ったのは母マリアと弟子ヨハネ、またマリアの姉妹とマグダラのマリアだけでした。他の弟子たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げてしまったのです。そんな中でシモンは強制されてですが、十字架を背負って、イエスのあとに従ったのです。シモンは自分が背負っている十字架が何を意味する

のか、その時はわかりませんでした。しかし、あとになって、その十字架が、神の御子が人類の救いのためにご自分を献げられたものであることを知りました。マルコ 15:21 には、このシモンは「アレキサンデルとルポスとの父」と紹介されており、「ルポス」の名はローマ 16:13 にローマ教会のメンバーとして出てきます。シモンは、一家をあげてキリストを信じる者となり、キリストに従う者となったのです。

レントの期間、大勢の人が実際の十字架をかついで行進する慣わしがあります。大勢の人がかついでさえ重い十字架を、イエスは背負ってくださり、シモンはイエスに代わってそれを背負ったのです。十字架の重さを自分で体験してみるのはイエスの愛を理解するのに役に立ちますが、イエスが私たちに「背負え」と言われた十字架は、その時だけかついで終わるようなものではありません。イエスは、弟子たちに、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、〝日々〟自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」と言われました。「日々」という言葉が加えられています。十字架を負うのは、年に一度、レントや受難週だけにするだけのことではなく、「毎日」のことなのです。「毎日十字架を負う」、それは、毎日、自分がイエスの十字架によって罪を赦され、神の子として受け入れられていることを確信することです。「自分を捨て」というのは、自分の考えや判断に信頼したり、自分の努力で赦しや神の愛を勝ち取ろうとするのでなく、ただイエスの恵みに、神の

あわれみに頼ることを言っています。そして、シモンがイエスのあとをついていったように、私たちも、イエスの足跡を、信仰によって、一歩、一歩、歩いていくのです。

イエスは私たちに「ついて来なさい」と言われます。「さあ、自分の力で人生を切り拓け」、「がんばれ」と後ろから私たちを追い立てるようなお方ではありません。イエスは、いつでも私たちの前を歩んでくださいます。苦しみ、悩みの道であればあるほど、先に進んで、道を拓いてくださいます。私たちはイエスの後をついていくのです。シモンはイエスの前を歩きませんでした。きょうの箇所の最後に、「この人に十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた」とあるように、うしろをついていったのです。私たちもイエスについていきましょう。イエスに従いましょう。イエスは、従う者を必ず守り、導いてくださいます。

（祈り）

父なる神さま、主イエスは十字架への苦しみの道を歩まれました。人の罪が主を十字架に追いやりましたが、主はその罪をご自分の身に引き受け、その罪から私たちを救ってくださいました。主は私たちをあなたのもとに導くため、ご自身がその道となるために悲しみの道を歩まれたのです。私たちも、主イエスに従います。主に従う道にある平安と喜び、いのちと力とを与えてください。主イエスのお名前で祈ります。

小羊になった羊飼い
イザヤ 53:7-9

53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。
53:8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。
53:9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかったが。

イースターの前の日曜日は「パーム・サンデー」と呼ばれます。イエスがろばの子に乗ってエルサレムに入城されたとき、人々が手に手にパームの葉をもち、「ホサナ、ホサナ」と叫んで、イエスを迎えたからです。

しかし、人々の「ホサナ、ホサナ」の声は金曜日には「十字架につけろ、十字架につけろ」という声に変わりました。日曜日にロバの子に背負われ、喜びの声の中を進んで行かれたイエスは、金曜日に十字架を背負わされ、嘆きの声の中を歩まれたのです。

一、預言されたイエス

そのようにエルサレムで苦しみを受け、十字架にかけられることを、イエスは、早くから弟子たちに何度も告げておられました。マルコ 10:33 に「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは、

人の子を死刑に定め、そして、異邦人に引き渡します」とある通りです。

それだけでなく、救い主の苦しみと死は、イエスがそれを予告なさった、はるか以前、何百年も前から、聖書によって預言されていました。数多くの預言の中でも、イザヤ 53 章が最も克明にイエスの十字架を予告しています。イザヤは紀元前 740 年ころ、ユダのウジヤ王の時代に預言者としての働きを始め、およそ 60 年にわたって、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤと、三代の王たちに仕えましたが、その晩年、紀元前 680 年ころ、マナセ王の時代に、のこぎりでひかれて殉教したと伝えられています。イザヤはイエスがお生まれになる 700 年も前の人ですが、イエスの十字架を見たかのように、救い主の苦難と死を描いています。イザヤ 53 章を読んでいると、まるで福音書を読んでいるかのように感じます。

1 節の「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか」は、人々がイエスを信じなかったことを言っています（ヨハネ 12:37-38）。

3 節の「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった」との言葉は、イエスがご自分の民から斥けられたことをさしています（ヨハネ 1:11、ルカ 23:18）。

5 節の「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私

たちはいやされた」は、イエスの苦しみと死が人の罪の身代わりであったことを言っています（ローマ 5:6-8）。

7 節の「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない」という言葉は、イエスが裁判のとき、ご自分に不利な偽りの証言によって責められても、沈黙を守っておられたことをさしています（マルコ 15:4-5）。

9 節の「彼は富む者とともに葬られた」というのは、イエスの遺体が、アリマタヤのヨセフという裕福な人の墓に収められたことによって成就しています（マタイ 27:57-60）。

12 節の「そむいた人たちとともに数えられた」という言葉はイエスが犯罪人と共に十字架につけられたことを言っています（マルコ 15:27-28）。

使徒 8:34-35 で、エチオピアの役人は、イザヤ 53 章を読んでいましたが、「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか」と伝道者ピリポに質問しました。ピリポはイザヤ 53 章はイエスのことを語っていると答え、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えました。ピリポが伝道した時代には、まだ福音書が聖書に加えられていませんでしたので、エチオピアの役人はイザヤ 53 章が誰のことかが分からなかったのですが、今では、福音書を読んだことのある人なら、これがイエスのことを言っていることが誰

にも分かります。イエスの十字架は偶然起こったことではなく、神のみこころによって計画され、預言されていたことで、イエスがそれを成就した出来事なのです。

二、小羊イエス

きょうの箇所で特に注目したいのは、7節に「ほふり場に引かれて行く小羊のように」とあるように、イエスが「小羊」と呼ばれていることです。

ユダヤの人々が「小羊」と聞いて、すぐに心に思い浮べるのは「過越の小羊」のことでしょう。ユダヤの人々は、先祖たち、アブラハム、イサク、ヤコブの時代には、家畜を追って生活する遊牧民でした。ヤコブの子、ヨセフがエジプトでファラオに次ぐ地位についたため、一族はエジプトに移住し、そこで増え、強くなっていきました。

やがて、エジプトに、ヨセフのことを知らない別の王朝ができ、そのファラオは、ユダヤの人々が力を増すのを恐れ、彼らを奴隷にして苦しめました。神はユダヤの人々の苦しみをご覧になり、モーセを遣わし、ファラオに神の言葉を告げさせましたが、ファラオはそれに従いませんでした。そのため様々な災害がエジプトに下されましたが、その最後のものが、エジプト中の初子という初子がファラオの長男からはじめて、家畜の初子にいたるまでが一夜のうちに死ぬというものでした。

しかし、これによってユダヤの人々の長子までもが死んでしまわないように、神はこの災いからの救いをユダヤの人々のために備えてくださいました。人々は、その

家の長子の代わりに小羊を屠り、その血を家の入り口に塗りました。すると、その災いはその家を過ぎ越していったのです。人々はこれによって、奴隷から解放され、神の民となり、イスラエルという国を建てました。このことを記念したのが「過越祭」で、イエスがエルサレムに入城なさったのは、ちょうどその過越祭の時でした。イエスは全人類のために、その身代わりとなり、「過越の小羊」となって、十字架で血を流してくださったのです。

イエスがエルサレムに入城されたとき、人々は「ホサナ」と叫びましたが、この言葉のもとの意味は「救ってください」です。人々は無意識にそう叫んだのかもしれませんが、イエスは「救ってください」という人々の叫びを真剣に受けとめてくださいました。イスラエルもエジプトで奴隷であったとき、神に救いを求めて叫びました。

どの人にも「救われたい」という願いがあります。しかし、罪から救われなければならないことが分からないため、「ほぼ幸せな生活ができているから、救いなどいらない」と考えて、真剣に救いを求めることをしないのです。しかし、救われるまでは、私たちは罪の闇に閉じ込められていました。手探りでしか進めず、あちらの問題にぶつかり、こちらの苦しみに沈んでいました。けれども、イエスを信じたとき、光の中をまっすぐに歩むことができるようになりました。罪の中にいて平安であることはできません。絶えず恐れがつきまといます。しか

し、イエスの十字架によって罪の赦しを得るとき、たましいに言いようのない平安がやってきます。罪によって傷ついた心と生活、家庭や人間関係が癒やされていきます。小羊イエスが私たちを罪の奴隷から解放してくださる。この救いを、信じて、確信して、そして、人々に示していきたいと思います。

三、羊飼いイエス

イエスが「神の小羊」となられたことは、聖書の多くのところに書かれていますが、ペテロ第一 2:22-25 には、イザヤ書を引用して、こう言っています。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」

この言葉は、イエスが神の小羊であり、同時に、私たちの「牧者」、「羊飼い」であると言っています。羊飼いは羊を飼う者、羊は羊飼いに飼われる者ですから、イエスが羊飼いであり、私たちがその羊であるというのは分かるのですが、イエスが羊飼いであり、同時に小羊で

あるというのは、イエスの十字架なしには理解できないことです。

イエスは言われました。「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ10:11）イエスはそのお言葉どおり、神のもとから迷い出てしまった私たちのために、その罪を背負って、身代わりのいけにえとなり、「いのちを捨てて」くださいました。イエスはまず神の小羊となって私たちを罪から救い出し、それから、救われた者の羊飼いとなってくださったのです。

もし、私たちがもとから従順な羊であれば、イエスは羊飼いだけであって良かったのです。私たちのほうから羊飼いであるイエスのもとに立ち返って、その牧場で楽しめばいいのです。しかし、私たちは羊飼いであるイエスから遠く離れていました。聖書では神を信じる者は「羊」、そうでない者は「山羊」、神に敵対する者は「獣」にたとえられていますが、神から離れた私たちは、羊か山羊か、または獣かの区別がつかないほどのものになっていたのです。イエスは、そんな私たちを「羊」として扱い、迷った羊を捜し出し、羊のためにご自分のいのちを差し出してくださったのです。

イエスは言われました。「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。」（ヨハネ10:16）ここで「ほかの羊」と言われているのは、本来

は、やがて神の牧場に加えられる異邦人のことを指しています。しかし、現代の私たちの立場から見れば、まだイエスとその救いを知らず、信仰に至っていない人々のことと考えていいと思います。イエスは、救われて神の牧場にいる人々を愛し、養い、導いてくださっていますが、同時に、この神の牧場にまだ戻って来ていない羊たちのことを絶えず心にかけてくださっています。

今、世界は混乱しており、人々は自分たちを導いてくれるものを見失っています。マタイ 9:26 にイエスは「群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた」とありますが、イエスの時代の人々が「羊飼いのない羊」のようであるなら、今の時代ではもっとそうだと思います。私たちには確かな羊飼いの導きが必要です。たとえ世界が揺れ動いても決して動かない安全な安らぎの場が求められています。私たちはイエスの十字架の福音を聞き、イエスは私のために死なれたのだと分かり信じたとき、心に光がさしこみ、平安と希望を与えられました。この救いの確信を得ることによって、現実がどんなに理不尽で、苦しいものであっても、平安や希望が奪い去られることのない、不思議な心の満たしを体験しています。それが、イエスの牧場の中にいる幸いです。私たちはこの幸いに感謝するだけでなく、この牧場の外にいる人々がイエスの声に聞き、ひとりの羊飼いのもとに、ひとつの群れとなることを、心から願い、祈っていきたいと思います。

イエスは「羊飼い」であり、「小羊」です。私たちを

愛し、私たちを罪から救うために小羊となって、打たれ、苦しめられ、いのちさえもささげてくださった「羊飼い」です。こんな不思議な羊飼いは、イエスの他、誰もいません。イザヤ 53 章を成就されたのは、イエスだけです。私たちは「小羊」イエスによって救われ、「羊飼い」イエスによって養われ、導かれます。この幸いを、神に感謝し、また、人々に分かち合いたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちを救うあなたの愛は、何千年も前から聖書によって示され、イエスの十字架によって成就しました。イエスの十字架を覚えるこの特別な週に、小羊であり、羊飼いであるイエスを深く想い、信じ、愛し、慕う私たちとしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

Penguin Club
www.penguinclub.net